



小規模なぶどう農家になってみて

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
バイエルクロップサイエンス株式会社 開発本部長
渡辺 賢

4年ほど前に東京都23区に隣接する市に居を構え、庭で毎年野菜や果物を作って楽しんでいる。もともと農学部出身であることから、農業そのものに対する興味が高いことが家庭菜園を行っている主な理由であるが、長年農薬メーカーに勤務しマーケティングと開発業務に従事しているため、少しでも生産者と同じ立場から農業と向き合いたいというのももう一つの理由である。畑では夏にはきゅうり、ミニトマト、オクラ、さつまいも、いんげんまめなどを輪番で植え付け、秋から冬にかけてははくさいやキャベツといった葉菜類を栽培し、年間を通して収穫の喜びを楽しんでいる。

もう一つの大きな挑戦は、カーポートでのブドウ栽培である。今では国内で最も人気のある品種となったシャインマスカットと定番品種の巨峰を植樹し、主枝をカーポート下に誘引し雨よけ栽培を実施している。植樹後3年目からはなんとか1樹あたり20～30房のぶどうを収穫できるようになった。今年が5年目のシーズンである。スーパーで売っている商品と遜色ない品質のシャインマスカットを初めてカーポートの下で食したときの喜びは今でもしっかりと覚えている。

ブドウ栽培で重要な要素は、適切な雑草・病害虫防除もその一つではあるものの、剪定作業、施肥管理、無核化と果実肥大を促す植物ホルモン処理、鳥害対策などがあげられる。特に永年作物の将来の樹形をデザインする1～2年目の冬場の剪定作業は、その後の樹形がほぼ決まり、収穫量などにも直接影響を与えるので大変重要な作業である。

最も苦労が大きいのは鳥害対策である。初めて生った巨峰が緑色から紫色に変化し始めた2年目の夏の終わりに、ある朝、半分以上の巨峰がカラスに食べられていた。翌日もその翌日も彼らはやってきては次々とブドウを食べていき、地面に皮だけを残して去って行く。房を袋掛けしても嘴で破いてしまうし、個別にネットで覆ってもその上から食べてしま

うのだ。最終的にはカーポートの4面全体をネットで覆うことで事なきを得たのだが、車はカーポートから追い出されてしまい、夏から秋にかけては終日炎天下にさらすことになってしまい何のためのカーポートなのか本末転倒である。

病害虫については総合防除の重要性を学ぶこととなった。春になるとあちこちでヤブカラシが繁茂する。本種は地中に地下茎が残っていると、たとえ地上部を枯死させても次々と再生してしまう難防除雑草であるが、ブドウを食すブドウスズメというガの食草でもある。ブドウスズメの終齢幼虫は大人の中指くらいもありその摂食量は全く無視できない。ブドウを守るために敷地内のあらゆるヤブカラシも防除する必要がある。

3年目はカラス対策も万全で大きな問題もなく収穫できたのだが、4年目は巨峰でべと病を出してしまい、果実にも感染したため思うような結果が得られなかった。おそらくは前年の落葉や落枝といった残渣を完全に除去せずに放置したため、感染源となってしまったのだろう。そこで昨年の冬はカーポート周りを徹底的に清掃し残渣の除去を行った。その結果5年目の6月現在では、薬剤散布を数回行うことでほぼ問題なく病気の発生を防げている。ところが今年はまた別の害虫が発生している。一つはブドウスカシクロバというガの幼虫、もう一つはキマダラカメムシという近年急激に北上を進めている大型のカメムシで、ブドウの葉に産卵し無数の幼虫が発生している。

改めて生産者の立場に立って作物を栽培して実感したことは、生産者は極めて多くの事象に短期間に対処しなくてはならず、私たちが専門としている雑草・病害虫防除対策は、あくまでもその一部であるということである。私たち農薬メーカーはいかに効率的に、かつ多角的な視野で、私たちが提供する農薬をどのように使えば最大限の効果をえられるかを伝えなければならないことを深く感じている。